

平成22年度

学校経営計画
(スクールマネジメントプラン)
(実施段階)

平成23年3月25日

京都府立嵯峨野高等学校

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
<p>◇ 「学校力」を向上させ、府民から信頼される学校づくりを行う。</p> <p>◇ すべてにおいて、安全・安心の学校づくりを行う。</p> <p>◇ 「Sagano Dynamics」を推進する学校づくりを行う。</p> <div data-bbox="249 736 765 904" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>Sagano Dynamics : the way in which things or people behave and react to each other</p> </div>	<p>① 遅刻防止への取組や自転車の傘差し運転の指導に成果が見られ、概ね落ち着いて規律ある学校生活を送らせることができた。ルールやマナーの向上を図る指導を今後も継続する。</p> <p>② 重点目標を定めた年間13回の大掃除や、ゴミの分別のために校内のゴミ箱を一新したことなどにより校内美化に成果を上げた。自ら進んで学校を美しくする行動ができる人間を育て、環境意識の向上を図る教育を進める。</p> <p>③ 学習習慣定着月間を設けるなど指導に工夫を重ね「学習のトライアングル」の確立を図るよう指導した。生徒による授業アンケートによると、およそ90%の生徒が授業で学力向上が実感できると答えていることから、授業への期待感が高いことがうかがえる。しかし、家庭学習時間がまだまだ十分確保されているとは言えない。</p> <p>④ 保護者アンケートからは、「Sagano Dynamics」の取組が周知されてきたことがうかがえた。「Sagano Dynamics」の具現化を目指して「学力向上フロンティア校」「SPP」の各種指定事業を推進した。サイエンスレクチャーシリーズに引き続いてアカデミックレクチャーシリーズを始めるなど幅広い、内容の濃い特色ある教育活動を展開できた。ラボの充実など魅力ある教育内容への改革を進める。</p> <p>⑤ 平成22年度設置の普通科第Ⅱ類理数系の志願倍率は府内最高となり、京都こすもす科を含めて、本校への目的意識の高い生徒の志願に結びつけることができた。</p> <p>⑥ 難関大学等への進学者数も増加した。生徒一人一人の課題を明確にして、教職員の一致した指導体制が生徒の学力向上につながったと言える。また2学年の朝学習の取組など、生徒の実態に応じたこまめな取組を積み重ねた。難関国公立大学をはじめとする第一志望実現のために、1年次より志望校への進学意欲の向上をはかるような取組をあらゆる教育活動を通じて進めて行く必要がある。</p>	<p>◇ 正しいルール・マナーの徹底と、基本的な生活習慣の確立</p> <p>◇ 校内環境美化の徹底と、環境改善の意識定着・実践</p> <p>◇ 学習のトライアングルの確立と、質の高い学力の定着・向上</p> <p>◇ 計画的な進路指導の徹底と、生徒の第一希望進路の実現</p>

領域	重点目標	具体的方策	最終評価	成果と課題	
組織とその運営	学校評価システムを計画的・機能的に運用し、教育の質の確実な向上を図る。	生徒による授業評価アンケート及び学校経営計画中間評価、総括評価を計画的に行うとともに速やかに結果を公表する。	B	年間2回(6月・10月)に生徒による授業評価を実施し、教科会議で課題の整理を行い、授業改善に繋げた。学校経営計画中間評価は過年度との比較を行い、年度後半の課題を明らかにした。	
		学校評議員や保護者による外部評価を充実させ学校改革に生かす。	B		保護者による学校評価を年間3回(10月と11月)実施した。アンケートの回収数は昨年度を超え(昨年度417名、今年度436名)、今年度も多数の保護者による評価が実施できた。今年度もSagano Dynamicsの保護者への浸透が図れ、本校の教育活動への理解が深まっていることが伺えた。学校評議員会を3月に開催し、外部評価を行っていただいた。
	災害・防犯等学校の危機管理について、日頃から対応できるよう教職員・生徒の共通理解を深める。	防災・防犯等で更に工夫すべきことを検討し、安心・安全の観点から迅速な対応を行う。	B	B	日常より安全安心の学校作りの観点で校内整備を行っている。
		日頃から危機管理意識を高め、学校施設設備等の点検を常時行う。	B		昨年度実施できなかった避難訓練を1学期末に実施した。生徒は教員の指示のもとにきばきと動くことができた。地震等の不意の災害にも備え、日頃から危機管理意識を持ち、その体制を整えておくことが必要である。
		体育系部活動の生徒代表に対してAED講習を実施する。	A		1学期末に体育系部活動生徒34名に対し、右京消防署の協力を得てAED講習会を実施することができた。次年度も継続して実施する必要がある。
	学校経営方針を実現するため、一致した指導と連携した組織運営を行う。	学校経営計画の内容を十分認識し、関係分掌と連携を保ち、協力し合い、一致した指導を行う。	B	B	毎週の部長会議において、各分掌より所管事項の説明を行うとともに意見集約を行い、それぞれの分掌の役割を明確にして一致した指導が行えるように努めた。次年度も引き続き、連携・協力関係を強化したい。
		学年部をはじめ、関連分掌及び各教科との連携に努め生徒個々の進路選択を支援する。	A		各学年とも年間2回以上の教科担当者会議を開いた。担任から生徒個々の学習成績状況・進路希望状況を説明し、教科担当者から授業の様子や課題提出状況を説明することを通して個々の生徒の指導方針を確認し、検討会議が有効になるように努めた。
		指導の方向性を一致させるために各分掌は情報を収集し、部内での伝達に努める。	B		毎週の学年会議・分掌会議において部長会議の報告と各学年・分掌からの要望等を確認し、情報の共有と指導の方向性が一致するように努めた。
	個人情報保護の観点も踏まえ、セキュリティを確保しつつ効果的な校務管理体制を推進する。	本校独自の校務システムを円滑かつ確実に運用する。	B	B	定期考査ごとの成績処理について、ポイントを押さえた諸連絡プリントを教務部が作成することにより、遅滞することなく正確に本校独自の校務システムを運用することができた。
		成績等の生徒情報に関して、十分な注意をもって取り扱う。	B		成績等の生徒情報は、細心の注意で取り扱うことができた。
学習と進路指導	授業を中心に据えながら、計画的な学習習慣の確立により学力の定着を図る。	自宅学習チェックシートを定期的な生徒に書かせ、指導に役立てる。	B	2・3年生は定期的に自宅学習チェックカードを記入させ、1年生には1年間を通じて自宅学習チェックカードを記入させることで学習習慣の確立をはかった。1年生においては、11月の進路希望調査時の自宅学習時間がⅡ類人文系と京都こすもす科において、例年に比べ増加した。	
		授業のベル開始を励行する。	A		ベル開始を励行するべく本鈴の2分前に予鈴を鳴らし、生徒が教室に入って着席して教科担当を待つように指導した。

領域	重点目標	具体的方策	校内評価	成果と課題
学習と進路指導(つづき)	授業を中心に据えながら、計画的な学習習慣の確立により学力の定着を図る。(つづき)	50分の授業を大切にす姿勢を養う。	B	B 年度当初に各教科・科目の学習目標の説明を教科担当が丁寧に行うことで、生徒の授業に対するモチベーションを上げるように努めた。その結果、年間を通して年度当初の授業への姿勢を維持・向上させることができた。次年度も生徒の興味関心を引く授業研究に努め、授業改善を図っていく必要がある。 新入生4月のステップアップセミナー(宿泊研修)やLHRを用いた進路学習において、ホームルーム担任や教科担当から本校の推奨している「学習のトライアングル」を構築して、日々の積み重ねがいかほど大切であるかを説いた。次年度も自律的な学習習慣の確立が図れるよう入学当初だけでなく平素からの指導に努める必要がある。 週末課題、長期休業中の課題については、一覧にして生徒と保護者に示し、計画を立てて自学自習できるようにした。 予習・復習を徹底させるため、家庭学習定着月間等に「自宅学習チェックカード」を記入させ、担任の点検を受けるようにした。ただし、定着月間以外ではおろそかになる生徒もあり、継続した働きかけが必要である。 新入生4月のステップアップセミナー(宿泊研修)において、学年部長・教務部長・進路指導部長から切り込み口を変えた講話を行い、学習習慣の重要性を認識させるようにした。ステップアップセミナーの翌日から家庭学習定着月間を設定し、生徒自ら家庭学習を充実させ授業に真剣に臨むように指導した。また、自宅学習チェックカードを年間を通して記入させるようにした。 進路指導部が中心となって各教科の要望を聞き入試関連教材の整備を進めるとともに、各教科においてもこれまでの経験と蓄積を有効に使った独自教材の開発にも取り組んだ。 業者からテスト結果が返ってくるたびに、進路指導部が迅速にデータ処理を行い、そのテストから伺える生徒の課題を明確にして、部長会議や職員会議、教科担当者会議で説明した。それぞれの課題を教員間で共有し、教科指導に生かすようにした。
		自律的学習習慣の確立や日々の学習の積み重ねが進路希望達成につながることを理解させる。	B	
		課題の提出を徹底させるとともに予・復習を習慣付けさせ、学習習慣の自己管理を促す。	A	
		授業を中心とした学習展開をさせるために、予習・復習を徹底させる。	B	
		1年からの学習習慣が進路実現に繋がることを認識させる。	B	
		授業・補習において活用可能な入試関連教材の整備を進める。	A	
		スタディーサポート、実力テスト結果の分析に寄与するデータの整理に努める。	B	
生徒一人一人が高い進路目標を設定しその実現に向けて主体的・発展的な学習を促し、学力の向上を図る。	生徒・保護者との面談を充実させ、前向きに挑戦する姿勢を育てる。		A	A 日常から昼休みや放課後をフルに使って生徒面談を実施することができた。夏休みには、1学期の通知票を全保護者に面談で手渡し、学校の指導方針を保護者に伝え理解を得ることができた。 発展的な学習内容を多く取り入れ、生徒の学ぶ意欲を刺激し学力向上に努めた。 高い目標に向かって挑戦する意識を高めるため、ハイレベルも含め外部模試を積極的に受験し、自己点検の一助とするとともに、ねばり強く努力する気概を持つよう働きかけた。その結果、京都大学を始めとした難関大学や医学部への合格者が増加した。 平常補習では、I類対象講座と、II類・こすもす対象でハイレベルな習熟度別補習を開講し、最後までやり抜く指導を行った。 各学年とも教科担当者会議において、生徒の学習状況や学力について、また志望校の引き上げについて共通理解を図った。進路検討会を通して、進路部や教科担当者との認識の共有化を図り、おむね適切な出願指導に結びつけることができた。 模擬テストの復習について、7月の実力テスト受験前にHRの時間を利用して、模擬テストの受験意義や復習方法を具体的に示し、模擬テストの復習ノートを提出させる取り組みを第1学年で実施した。第2・第3学年においても、模擬テストの復習の重要性を進路指導部と担任から説き、「受けて結果を見て終わり」とならないように指導した。
		教材内容を再考し、発展的な学習内容も多く取り入れて生徒の進路希望達成を図る。	B	
		実力テストを計画的に受験させ、より高い目標を目指して努力し、希望の実現につなげる。	A	
		平常、長期休業中の補習では、生徒の進路志望、学力層に応じた講座を開講する。	A	
		生徒一人一人の学力の正確な把握に努め、進路検討会等を通して、指導方針の共通理解を図る。	A	
		実力テスト、模擬試験の事後の活用方法の改善に努める。	A	

領域	重点目標	具体的方策	校内評価	成果と課題
学習と進路指導(つづき)	自らの生き方や進路について主体的に考える力を育成するとともに、自らの進路適性を理解させる。	ロングホームルームやアッセンブリー等を通して生徒が情報を収集し、活用する態度を養うとともに、自らの進路決定能力、情報選択能力を養う。	B	2年生の進路学習において、学部や学科の調べ学習に取り組み、各自の進路選択の視野を広げるように指導した。 第2学年のLHRで学部に関する班別調べ学習を実施し、クラスで発表を行うとともに、各クラスの資料を学年で共有した。 キャリア教育の観点から講演会を実施した。次年度も将来を見通した人生設計を考えるよう、キャリア教育の観点から学部や学科選びの指導を行う必要がある。 ほとんどの生徒が本校卒業後進学していく。進学先(学部や学科、コース)を考える時に、大学名や偏差値で選ぶことのないように、進学先の卒業後のことを考えることを通して、将来の職業のことを考えさせるようにした。
		大学、学部学科、職業研究を主体的に進める機会を設け、自己の進路を見つめさせる。	A	
		進路学習を計画的に実施し、生徒のキャリア発達を支援し、多様な選択肢から自己の意志と責任において進路を主体的に選択することができるように援助する。	B	
		進路ガイダンス機能を充実させ、選択基準としての職業観を確立することの大切さを理解させる。	A	
類・系統の特色に応じた教育内容の充実・推進と類・系統間の連携を図る。		類・系統毎に生徒の指導動向の把握に努め、教育課程の改善、補習の講座展開、模試選択受験指導に役立てる。	B	平成23年度入学生の普通科第I類、1クラス化への対応について研究した。 今年度は従来の講座を大きく再編することによって、各講座の特色を生かした取組を行うことができた。次年度以降に継続させていくことが重要である。 昨年度からの変更を今年も継続して実施し、特に問題なく運営することができた。 自然科学系統2年生次のサマーフィールドワークでは、新規に数多くの大学・企業の研究室と連携を取ることができ、充実した内容とすることができた。アカデミックラボにおいても、各ラボの内容に関連した社会人講師の招聘やフィールドワークを実施することができた。 教育推進部の指示のもと、教科担当者が大学や企業の方と事前の打ち合わせを綿密に取ることができた。 例年通りの実施であるが、参加人数の増大に伴う新規訪問場所の開拓などの課題も達成できた。 年間の予定どおり各学年とも教科担当者会議を持つことができ、担任、教科担当、各分掌との連携をスムーズに行うことができた。 1年生次の「論理表現」は、これまで同様の教材を小人数講座として教えることにより、生徒の言語学習に効果をあげることができた。3年生次の総合的な学習の時間においては、国際文化を学ぶという趣旨のもと、ラオスから来日して日本の企業で働いている方を招いての講演を聞き、生徒が広い視野を持つことができるように指導した。
		アカデミック・ラボの開講講座・内容を一新して実施し、適切に運営できるように教育推進部が環境を整える。	A	
		サイエンス・ラボの実施時期の変更に伴い今年度の成果を検証し、2期目の運営に活かしていく。	A	
		高大連携(SPP含む)や高企連携をラボやレクチャーシリーズ、専門科目と関連させて一層の充実を図る。	A	
		高大連携、高企連携において教科担当者との連携を密にし運用の環境を整える。	B	
		1年のサマーセミナー(フィールドワーク・英語集中合宿)を企画・計画し実施する。	A	
		教科担当者会議を実施する。担任、教科担当、各分掌との連携を密にして、開催の実施時期や問題提議の方法を工夫して活発な意見交換の場を作る。	B	
		普通科における総合的な学習を円滑に進め、特色ある教育活動を展開する。	B	

領域	重点目標	具体的方策	校内評価		成果と課題
学習と進路指導(つづき)	新教育課程の編成に向けて検討を行う。	平成24年度実施の新教育課程のカリキュラム検討を行い、案を定める。	B	B	週1回、教育課程等検討会議を開き、新教育課程編成に向けての情報収集と本校生徒の学力分析とを行った。本校としての課題を明確にするようにし、本校の進むべき道を明らかにして新教育課程を編成していく必要がある。
		教育課程等検討会議で教育課程を不断に検証し、生徒の学力実態及び、大学入試改革に対応できるよう必要な見直しをする。	B		新大学入試センター試験に関する情報の収集を積極的に行った。次年度も情報収集に努めるとともに、生徒が高い希望を抱けるような魅力ある教育課程の編成に着手する必要がある。
生徒指導と特別活動	基本的な生活習慣を確立させ、自主的かつ規律ある集団を育成し、個性の伸長に努める。	あらゆる場面で挨拶・言葉遣いの指導を行う。	B	B	年間を通して、挨拶・言葉遣いに対する指導を行った。次年度も気持ちよく挨拶する習慣が身に付くよう指導を継続する。
		遅刻指導を毎日行い、遅刻者の減少に努め、時間を守る態度を育成する。	A		SHRIに遅刻しないように急ぐ生徒が多くなったことから、時間に遅れない意識を持たせることができたと考えている。次年度も継続した指導を行う。
		交通ルールの遵守を徹底し、傘さし運転や信号無視を防止するなど、通学マナーの向上に努める。	B		生徒会が中心となり、交通ルールとマナーを守る意識を高める活動を行った。今後も、さらに交通ルールとマナーに対する意識の向上を目指す指導を行う。
		学校における規則を守る集団を育てる。	B		ルールを守らせるよう指導を行い、落ち着いた学習環境を維持できた。
		反社会的問題行動・薬物・エイズ・煙草等の保健学習を行う。	B		薬物乱用防止講演会を2年生に実施し、生徒に薬物乱用の危険性を認識させることができた。次年度も講演会を実施し、身を守ることの大事さを認識させる必要がある。
		ホームルームが相互に高め合う集団となるよう一致した生活指導に取り組む。	B		文化祭や体育祭、球技大会、研修旅行等の行事への取り組みや日常の教科学習の場面において、クラスへの帰属意識が醸成できるよう担任や教科担当から指導した。
		職員室等への入室マナー指導をさらに徹底する。	B		各職員室、準備室への入室マナー指導を年間を通して行った。次年度も継続して指導を行う。
心身ともに健康に過ごす環境づくりを行い、自己管理能力を身につけさせる。	部活動への加入を奨励し、学習との両立を図らせる。	B	A	生徒の約80%が何らかの部活動に加入しており、学習にも頑張ることができている生徒が多い。	
	生徒の実態に応じた対応を行う。	A		学年部との連携のもと、健康診断結果や日常の疾病対応において速やかに保護者に伝え、迅速な対応ができた。1年生対象の学校医による歯科講話は内容が充実しており、85%の生徒が「よく理解できた」と答えた。	
	自己理解を深めさせ、将来設計能力を培うと共に、意志決定に伴う責任を受入、選択結果に適應する姿勢を身につけさせる。	B		進路学習や保健学習において自己理解を深めさせ、将来設計能力を培うように指導した。学校の指導方針を一定生徒に伝えることはできている。	
	教育相談会議を機能的に運営し、共通認識をする。	A		気になる生徒については、年6回の教育相談会議で十分検討するとともに、全教職員の共通理解を図り、組織的に対応することができた。スクールカウンセラーが有効に活用され、状況が改善された生徒も多い。	

領域	重点目標	具体的方策	校内評価	成果と課題	
環境美化	環境美化活動により、より良い学習環境づくりと施設設備の維持管理に努める。	ゴミの分別を徹底するとともに、ゴミの量を削減に努める。	B	B	ゴミの分別を徹底するために、昨年度全HR教室・特別教室・廊下・階段のゴミ箱を分別できるように設置したため、今年度も概ね分別できるようになった。また、今年度は秋の美化週間において「エコアドバンス活動」の一環としてリサイクル活動も行った。
		大掃除ごとに重点項目を示し、清掃活動を実施する。	A		日常の清掃に加え、年間13回の大掃除毎に重点目標を示し、教職員の協力、指導により徹底した活動を実施した。
		日常の清掃活動で、各自責任を持って役割を果たさせ、公共の場を汚さない気持ちを育て、学習の環境作りに努めさせる。	B		美化意識を高めるため、今年度も年度当初に啓蒙ポスターを各クラスに配布するとともに、「クラス対抗美化コンテスト」を実施した。クラスの保健美化委員や担任の指導のもと積極的に啓発活動ができた。次年度は、日常から公共の場を汚さない高い意識を持ってマナーある行動が取れるように指導に努める必要がある。
		教員は担当区域の清掃指導・監督に当たり美化の保全に努める。	B		年3回「美化強調週間」を設定し、保健部で清掃チェックを行い、担当の先生方へ美化の徹底を依頼した。また美化のための様々な備品・消耗品も充実させるようにした。生徒の美化保全に努める意識の涵養を図ることができた。
		節電に努め、ホームルーム教室の消灯を意識させる。	B		年度当初は環境問題への意識が希薄な面もあったが、節電・節水等の意識が向上するように啓発ポスターを作成したり、啓発シールを貼るようにしたりした。その結果、生徒の環境問題に対する意識の向上が見られるようになった。次年度もこの意識が低下することのないように指導の継続を図る。
		環境問題について、講演をはじめとして他分掌と連携し、意識の向上に努める。	B		1年生に対して3学期に環境問題・環境保全を考える講演会を実施した。ウミガメがプラスチックゴミなどを誤飲して死に至っていることなどを紹介し、生徒自身が身近なところで環境のことを考えていくことが大事である、ということを理解させることができた。
		校舎を取りまく緑豊かな自然の中、校舎内外に配慮し、全体としての学習環境の向上に努める。	B		毎朝の校舎周りの清掃を技術職員が担い、それを徹底することによって落ち葉やゴミの少ない校舎周りの良い環境を年間を通して維持することができた。校舎内も日常の清掃指導が功を奏し、おおむね満足できる学習環境を維持することができた。
メディアリテラシー	情報の選別能力と発信能力の向上を図る。	正確な進路情報を精選して伝達し、生徒の情報活用能力を育む。	B	B	生徒個々の進路選択に役立つ職業選択・研究専門書や、社会人講師の周辺資料や伝統芸能関係資料・時事問題を随時、展示し紹介できた。また、「小論文」の作成に供与できる書籍の案内ができた。
	学習・情報センターとしての学校図書館機能を充実する。	図書館の積極的利用を勧め、読書習慣の形成に努める。	B	B	1 図書室の活用に取り組んだこと。 新入生(国語科と連携して全クラス1時間)・教職員転任者オリエンテーションを例年通り実施し、新着と話題図書案内(「ライブラリーニュース」のクラス掲示・展示コーナー設置)を常時できた。また「予約カード」や「希望図書」を活用し広範囲の生徒の要求にほぼ応えることを心がけた。 2 読書意欲の向上に努めたこと。 読書感想文課題・推薦・話題図書を展示し、例年通り国語科の協力を得ながら連携して「読書感想文」を発刊できた。 3 図書委員会活動による読書習慣の形成 班活動(広報・情報収集・記録)の活用とカウンター当番の指導や、「読書週間」の設定と取り組み(「古本市」・ポスター作成と掲示・葉作成)を通して、委員会活動を活性化することができ、更に、「図書委員会便り」の発刊と先生や生徒の「おすすめ本」を紹介することにより広範な生徒に図書室への興味を持たせることができた。
	小論文、面接指導に関して進路指導部と図書部とが連携し、生徒の指導に当たる。	B	B	進路指導部と図書部とが連携して、小論文指導に関する校内研修会を実施した。図書館において、小論文に関する資料を収集し生徒に見やすい展示を心がけた。	
	図書資料等を収集し、情報を提供しながら生徒の学習意欲を高め、豊かな情操を育む。	B	B	情報の提供と図書資料の充実に取り組んだこと。 希望図書調査の実施とリクエストカードの呈示や、読書に関するアンケート調査を実施(内容は「読書感想文集」に掲載)し、また府立図書館巡回サービスを活用しながら生徒の興味と関心・意欲の向上と、多彩な図書資料の充実に努めた。 教科授業に寄与できる資料を必要に応じて提供・展示し、生徒の学習に貢献できるよう配慮した。 全学年の文化祭演目をビデオ収録し、本年度や次年度のクラス経営や発表の質の向上に役立たせるべく保存した。	

領域	重点目標	具体的方策	校内評価	成果と課題
家庭・地域社会との連携と広報活動	普通科及び京都こすす科に関する広報活動を充実し、学ぶ意欲をもった生徒の応募につなげる。	各説明会における「本校の進路指導」の内容を充実させる。	A	進路指導部が毎回趣向を凝らした説明を行った。参加した中学生はもちろんのこと、多くの保護者から子どもを是非とも本校で学ばせたいと思っていただくことができた。 要請のあった外部教育機関には、原則複数の教員で説明会に出向き、本校の魅力ある教育活動をアピールすることができた。 教育推進部と教務部とが中心となり、参加者の視点に立った説明会の在り方を考えて実施した。 総務企画部が中心となり、各分掌・教科と連携してホームページの更新を行った。 昨年度から始めた「活躍する卒業生」に今年度さらに新規の記事を含め、集冊版の発刊をした。学科案内を普通科を含めた「学校案内」に改訂した。「レター」についても定期的に発刊し、本校の取組成果構内外に広くアピールすることができた。 年間11回実施した各説明会ともホームページにその要項を載せ、参加者を広く募ることができた。
		本校における学科説明会等を実施する。中学校や外部教育機関などでの説明会の実施や、中学校や外部教育機関等の関係機関の訪問を行う。	B	
		説明会の内容や実施方法を改善・充実させる。	B	
		各系統の取組や特色をアピールできるように校内での種々の取組をまとめ、各種説明会やホームページで積極的に取り上げる。	B	
		学科案内やアカデミック・レター、サイエンス・レター、卒業生の活躍記事などの広報物を発行する。	A	
		ホームページなどを利用して、説明会の案内や学校紹介に努める。	B	
	家庭・地域社会との連携を図り、開かれた学校づくりの取組を行う。	メール配信やホームページにおける学年ページで情報提供を進める。	B	学年ページに行事の様子や学年だよりを載せ、学校内での様子が少しでも見えるようにした。 学年部と進路指導部とで連携して各学年の保護者会が充実したものになるよう努力した。 「お知らせメール」は毎週発信することができ、保護者アンケートにおいても学校のことがよく分かり大変助かる、と高い評価をいただいた。次年度も継続して取り組んでいきたい。 内容の充実を図ることができたが、発行回数が少なかった。次年度は発行回数を増やすことが課題である。
		保護者会の内容を充実させる。	B	
		PTAと連携し、お知らせメールを活用してきめ細かい情報の発信に努める。	A	
		「嵯峨野だより」の内容を充実させる。	C	
教職員の資質向上	指導力向上のため、研修の充実を図る。	進路指導の観点から校内研修の内容をよりよいものにする。	B	夏の教職員研修会において、新学習指導要領に基づくセンター試験の動向についての研修を行った。 総務企画部がその都度、朝の連絡会等を通じて教員に告知することができた。 進路指導部と学年部が連携を密にして、各学年の進路指導を推進することができた。今年度の取組を有効に活用できる蓄積とそれを全教職員で共有するシステムを構築する必要がある。 夏の教職員研修会において内容を見直して実施した。
		外部研修の機会を告知し、より多くの参加を促し、指導力の向上を図る。	B	
		様々な場面に応じた進路指導方法(経験)の蓄積と共有化を進める。	B	
		分掌研修を内容・実施時期を見直し、より時宜に合ったものとする。	B	
次年度に向けた改善の方向性				
次年度に向けた改善の方向性				<p>自ら学び自ら考え、自ら行動する生徒を育成する面を強く打ち出す方向性で教育内容の改善を図る。具体的には今年度の教育活動を通して次年度に更なる充実発展を図るために、改善点を以下にあげる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 質の高い授業を行うための研修を積み重ね、自ら学ぶ生徒を育てる方策を考え、より多く実施する。 2 ホームページを充実させ、嵯峨野高校の教育活動や教育成果を発信する。 3 指導を充実して、より高い希望にチャレンジする生徒を増やす。 4 特色ある教育活動をより多くの教員が関わり実施する。 5 学年部と分掌との連携により、学年の特質を生かした指導を展開する。 6 目指す教育は同じではあるが、系統や類型の特長を生かした教育活動を展開する。 7 言語の運用能力を高めるとともに発表機会を多く設けプレゼンテーション能力をつける。 8 他校生との文化的な交流を通して、吸収するだけでなく自らの意見や思いを積極的に発信してコミュニケーション能力を高める。 9 ルールの遵守と規範意識向上のための指導を充実する。